

## 産業組合の指導者

いわせ わ いち  
岩瀬和市

岩瀬和市は、1891(明治24)年、碧海郡古井村(現安城市古井町)の農家に生まれた。家庭の事情により高等小学校を退学せざるを得なかったが、勉強熱心で向上心が高く、農業に従事する傍ら勉学に励み、師と仰ぐ県立農林学校長・山崎延吉からの教えも受けていた。

1900(明治33)年に産業組合法が施行されると、農家が協同組織をつくることで、経済的な利益の確保を目的とした農作物の商品化や売買、資金調達などが可能となり、碧海郡でも集落単位で産業組合が設立され、活動の大変盛んな地域となった。

この産業組合については延吉が奨励しており、1915(大正4)年に古井産業組合が設立されると、和市は父・孫市の代理として活動し、1920(大正9)年には24歳で組合長となってリーダーとしての手腕を発揮した。延吉の教えを信じてひたむきに産業組合の発展に尽力した結果、県下でも優秀な産業組合として評価され、和市の名は指導者として知られることになった。

また同時期、碧海郡購買販売組合連合会(通称:丸碧<sup>まるへき</sup>)が郡内34の産業組合によって設立され、大正時代末には79組合、2万人もの組合員をかかえる全国有数の産業組合連合会となっていた。和市は1928(昭和3)年に第4代丸碧会長としてその運営を担うことになり、鶏卵・大根切干等の販売、米麦の保管・販売、肥料・飼料の購買などを手がけた。とりわけ全国的に丸碧を有名にしたのが鶏卵の販売である。関東大震災の救援物資として、鶏卵2千箱を無料で配布したのをきっかけに東京の業者との取引が始まり、以降の販売先として東京が98%を占めることになった。品質的に優れた卵として評価が高く、小売店の店頭では地卵と混同されがちだったため、宣伝も兼ねて卵の殻に直接丸碧マークをつけた。

三越百貨店などでも販売されたという。

丸碧の経営は好調で、組合が経営する更生病院(1935(昭和10)年2月11日竣工)は、組合員への近代的医療サービスと農村医療の発展に貢献した。この新事業についても和市は延吉からの激励を受けており、疾病こそが農民生活の経済を脅かすものとして捉え、健康を離れて幸福はない、との考えから設立し、延吉が更生病院の名付け親となった。

1941(昭和16)年、丸碧は愛知県販売購買利用組合連合会に事業を統合されて解散することになるが、「日本デンマーク」と賞賛された農村地域の向上に重要な役割を果たした。戦後も安城市農業協同組合長、愛知県農業共済組合連合会長を務めるなど愛知県下の農協の発展と農業振興に貢献した和市は、1965(昭和40)年、安城市名誉市民に推挙された。彼の銅像(胸像)は現在、JAあいち中央総合センター内で優しい笑みをうかべながら鎮座している。



## 岩瀬和市像

JAあいち中央総合センター内  
(安城市赤松町)

